

ずいそう

ビックリ、カイロ 初めてのエジプト出張



竹之内 博行

一昨年、昨年と2回にわたりそれぞれ3週間ずつ、JICAの仕事でエジプトの首都カイロに出張する機会を得た。この地域への旅は私にとって初めての経験だったので、見るもの聞くものすべてが驚きの連続だった。ほんの短い期間の、限られた地域での経験によるものだが、いくつか印象を綴ってみたい。

エジプトでの仕事は、日本からの技術支援により橋梁の維持管理技術をエジプトに根付かせようとするもので、エジプト政府の運輸省直下の組織である「道路・橋梁陸運総庁（GARBLT）」に対して行われたものである。私の役目は疲労に関する短期専門家という立場で、現地橋梁の点検調査とそれに基づくアドバイスやセミナーの開催などを行って、現地技術者のレベル向上を図るものであった。

活躍する女性

GARBLTを訪れてまず驚かされたのが、女性幹部の多さである。GARBLTは、道路総延長約24,000km、1,700橋余りを管理する大きな組織である。そのナンバー2である橋梁局長や設計課長も女性である（写真-1）。通訳や秘書はもとより、意思決定する立場で個室を持つ幹部技術者の多くが女性なのである。その比率は日本を大幅に上回っていると思う。女性上司にお茶を出し、指示書にサインをもらうために並んで待つ男性職員の姿は日常茶飯である。イスラムの女性は戒律に縛られて家庭内に閉じ込められ、教育もままならないようなイメージを抱いていたが、それとはまったく異なる状況であった。これらの女性幹部も家



写真-1 着任早々の幹部技術者との打合せ

に帰れば夫もいれば子育てもするだろうに、家庭ではどんな生活をしているのだろうか、などと余計なことが心配になったが、今回のミッションではそこを突っ込む余裕はなかった。ただし、橋梁工場を訪問した時や現場調査の際にはあまり女性技術者の姿は見えなかった。工場や現場では、政府機関のオフィスなどと違って女性は少ないのかもしれない。

ベリーダンス

組織の中核でバリバリに活躍するこれらの女性は、基本的にこちらの伝統的な服装で働く。日本であれば和服で霞が関の本省で働くような感じだ。スカーフのような布でしっかりと髪の毛を覆っている。親族以外には髪の毛を見せてはいけないような。もちろん髪の毛を覆わない女性もいるが、その辺の詳しい使い分けについてはよくわからない。なお、女性には握手も含め体に触れてはならないとのこと。この事務室でも、新任の日本人がエジプト人の女性秘書に「よろしくね」と軽く肩に触れた途端、“Don't touch me!” と叫ばれ、一時険悪な雰囲気になる事件があった。

全身がゆったりしたガウンのような衣服で覆われているエジプト女性の姿は謎である。服装に隠れて気付かなかったが、エジプト女性の肥満率はかなりのもので、WHOの世界ランキングで11位（ちなみに日本は178位）と、トップレベルだ。そのあたりの調査というわけではないが、仕事の最終日に、あこがれのカイロの踊り、ベリーダンスに連れて行って頂いた。最も品のいい踊りを見せてくれるという船上レストランのショーだった。肥満とは縁遠い鍛え抜かれた腹筋とリズムカルに動く腰のくねり、生の音楽と合わせてまさに「おー」と声が出るすばらしさ。美しく、迫力のあるセクシーな踊りであったが、驚いたのは周りの雰囲気。観客のほとんどが週末を楽しむ家族連れやデートを楽しむカップルで、男二人の我々がやや特異な存在だった。おまけに家族連れの子供たちが踊り子の周りでじゃれていたり、観客が飛び入り参加したりして、男目線で想像していたのとは大違いの家庭的で明るい雰囲気なのだ。あれだけ厳密に全身を覆う日常とのギャップは、一体何だろう。

雑踏の市街地

グーグルアースでエジプトを眺めてみれば一目でわかるが、エジプトの国土はほとんどが砂漠で茶色、ナイル川沿いだけに緑の地域があり、それが河口の扇状地で広がるハスの花のような形を呈している。カイロはそのハスの花の付け根に位置するアフリカ最大の都市である。カイロを一言で語るのは難しいが、東京と同様に高速道路があり高層ビルがあり下町の雑踏がある大都市だ。ただ、砂ぼこり、道端のごみ、車と人の混雑のレベルは、我々が日本で普段目にしていないものとは大きく異なり、最初は度肝を抜かれた(写真—2)。



写真—2 市街地の雑踏

市街での高速道路は、建設後かなりの年数が経っているものが多く、これから維持補修の必要性が増すものと思われるが、雑踏の中での仕事には様々な問題がありそうだ(写真—3, 4)。

砂塵の郊外

郊外では、砂漠を突っ走る高規格の幹線道路の建設が急ピッチで進められている。道路は国力の証であり軍事的にも重要な施設であることから、その建設においては軍隊の関与も大きいようだ(写真—5)。大型トラックと並走するロバに引かれた荷車と、砂埃と一緒にいつまでも消えてくならないビニール袋が舞い飛んでいる光景が心に残った(写真—6)。

別天地ザマレク

滞在中はカイロのザマレク地区のホテルに泊まった。ザマレク地区は、ナイル川の中州にあり、各国の大使館や外国人が多く住む場所で、カイロ市内でも最も落ち着きのある高級地区だ。安全性も問題なしということで、朝のジョギングも楽しむことができた。しかし、犬の糞と歩道の凸凹、そして自動車には細心の注意が必要だ。写真に撮ると、砂埃やゴミは写らないので、こんなにきれいな風景になってしまう。仕事で



写真—3 橋の上にも露店



写真—4 街中での橋梁点検



写真—5 郊外の幹線道路



写真—6 ロバも走る



写真—7 別天地ザマレク

走り回った道路から見る景色と比べれば、この地区は確かに別天地かもしれない(写真—7)。余談だが、帰国後、この川のためとで起きた爆弾事件のニュースを聞いて、胸をなでおろした。

4,500年の歴史を訪ねる

休日には、ギザのピラミッドを中心に有名な観光スポットを駆け足で巡ることができた。短時間ではあったが、古代からのエジプトの歴史に直接触れることが出来て、当時の文化の素晴らしさやそれが今に実物でつながっていることに感動した。中でも安置されているミイラ表情が、つい寸前に息を引き取ったかのようにリアルで、永遠の命を信じた当時の人々の思いが、4,500年の年月を超えて伝わってくるような気がした(写真—8)。

また、エジプト考古学博物館には歴史や美術の教科書でしか見たことがない品々が、すぐ目の前に、見切れないほど陳列されている。こんな素晴らしい文化遺産を持つ国民が、最近の暴動の際にはここに入り込み、



写真—8 4,500年の歴史を訪ねる

いくつもの貴重品を壊したり略奪したりしたそうで嘆かわしい。どうりですぐそばには装甲車が何台も配備されていたわけだ。

見慣れぬ景色もしばらくすると慣れてしまう。砂まみれの街路を車に轢かれぬようにすれすれに避けながら、ごみを跨いで歩くこともあたりまえになってしまう。仕事もこちらの人のリズムに合わせれば、楽しくできるようになる。まこと人間の順応性の高さには感心するばかりである。しかし、日本に戻って、改めて青い空と澄んだ空気を吸い、ごみが落ちていない街路や整然とした車の流れを見たり、新鮮な日本料理を味わったりすると、異国での緊張感が一気に解放されて、故郷に帰った、という思いがこみあげた。日本の国土や日本人の気質についていくつも再認識させられた出張だった。

——たけのうち ひろゆき (一社)日本建設機械施工協会
施工技術総合研究所 技師長——